

発 刊 に あ た っ て

中庭のケヤキが、芽を吹く準備をしています。センターの組織改編も、まさに「静岡県の教育」の芽吹きに向けた、開所以来の大改革です。

「カリキュラムセンター」「特別支援教育センター」「生涯学習推進センター」といったそれぞれの機能が、県下すべての学校、教職員、あるいは地域の皆さんと放射状に繋がって、連携のネットワークが完成します。そこから、学校現場では、新しい「学校づくり」が進展し、学習の場としての学校が外に向けて開かれ、地域では生涯学習の理念に立った創造的な学習が展開します。

教育改革の激動を越え、「子どもの学び」に焦点化して、自主性・自立性のもと、落ち着いた実践が展開されていく学校が、地域との役割の中から教育と学習の場を確立すると、それは、ネットワークを通じ、評価としてセンターに伝えられ、教育情報基地としてのセンターの信頼となっていきます。このネットワークの核心に「研究」が位置付けられているのです。

「研修と研究の一体化」は、かつての三島の研修所、情報処理教育センター時代のキーワードでした。当時は、それが当たり前のようになっていました。

しかし、改革期の今日ほど、その重要性が増している時はありません。平成 16 年は、大きなターニング・ポイントですが、ターンした時、その先の方向が確かめられるか、という問いかけとともに、今年度の研究は、いっそう重いものとなりました。「学校の自主性・自立性」が、単なる飾り言葉ではないからです。

特別支援教育課の「特別支援教育の理解推進に関する研究」は、養護教育新世紀に、養護学校のセンター的な役割と「学校づくり」、さらに「生徒のニーズに立った教育への取り組み」の課題で、教育改革の推進という、センター改組のねらいと合致したものとなっております。

また、教育相談課の「不登校児童生徒への支援に関する研究」は、学習支援の持つ重要性を再確認して、「学ぶこと」と「生きること」を見直そうとする広範なテーマに繋がるものであります。

これらの研究は、いずれも、改革の方向付けはもちろん、不易の教育をしっかり踏まえた重要な研究であり、教育の信頼に繋がる、今日的な研究です。

一人一人の教職員はもちろん、学校を取り巻くすべての方が、これらの研究を明日の実践へと繋げていただければ幸いです。

平成 17 年 3 月

静岡県総合教育センター 所 長 天 野 龍 生